郷土のニュース

◆大入島埋め立て反対

住民、県に入札延期の要望書

県が計画している佐伯市大入島石間区の埋め立て事業に反対する住民ら約五十人が七日、県庁を訪れ、十六日に予定されている工事の入札の延期を求める要望書を、池田薫港湾課長に提出した。

要望書では①石間区が磯草の権利を持ち、アワビやサザエを採取した利益を区や婦人会などの行事に利用してきた②磯草の権利を無視して工事を強行しようとする行為は、県が区民の利益を強奪するに等しい③公有水面埋め立て免許の取り消しを求める訴訟を起こしており、この手続きを無視する工事は避けてほしい――などと訴えた。

池田課長は「住民の皆さんが県漁協を相手取って起こした裁判の判決には、磯草についての慣習法による権利として認めることはできないとある。手続きに問題はなく、入札は予定通りに行いたい」と答えた（『大分合同新聞』平成十五年五月八日版）。

◆「埋め立て免許の取り消しを」

大入島住民が提訴

佐伯市大入島の埋め立て事業に反対する、同島石間区と同区の住民八人は十七日、知事に公有水面埋め立て免許の取り消しを求める訴訟を大分地裁に起こした。

訴状によると、県は海面約一七・三㌶を埋め立てる佐伯港大入島廃棄物処理事業を計画。佐伯市漁協（当時）と県漁協は漁業権の放棄を決議。県は公有水面埋立法に基づき、埋め立て免許を出願。今年一月、知事は埋め立てを許可した。

住民は「許可は、長年の慣習によって貝や海藻を採る磯草の権利がある住民の同意を欠いている」と主張している。

県は「訴状が届いていないためコメントできない」としている（『大分合同新聞』平成十五年四月十八日版）。

◆佐伯市に国木田独歩館　三十日から一般公開

―明治の文豪面影感じて―

明治の文豪・国木田独歩が下宿した旧坂本邸跡を修復した「城下町佐伯・国木田独歩館」が佐伯市城下西町に

完成、三十日から一般公開される。独歩の作品をパソコンの画面で読むことができる土蔵の読書室や、独歩が生活した居室など。武家屋敷跡の白壁が続く山際通りに再現された独歩館は、新しい観光名所となりそうだ。

独歩は明治二十六年(一八九三)九月、毛利家十三代毛利高範が設立した「鶴谷学館」の教頭として二二歳で赴任した。教育方針をめぐって対立、職を辞して上京するまでの約十ヵ月間、鶴谷学館長だった坂本永年邸の二階で弟とともに下宿生活を送った。

坂本邸は、同市女島区にあった佐伯藩主の別荘だった「お浜御殿」を、旧佐伯藩の城があった城山のふもとに明治三年(一八七〇)に移築、最近まで住宅として使われていた。約二〇年前に制定された市歴史的環境保存条例で保存対象になり、坂本家の協力で五年前から修復を始めていた。

完成した国木田独歩館

移築当時は、一一六五平方㍍の敷地に二階建て約一六五平方㍍の主屋と約五〇平方㍍の土蔵があり、城山につながる裏庭には井戸屋形などもあった。その後、住宅として使うために改修が進められていたため、資料や当時の写真などを参考に修復・再現したという。

完成した独歩館は、冠木(かぶき)門をくぐると母屋に続く道の右側に当時のままの庭が再現され、静寂な雰囲気。母屋の一階は、独歩が過ごした明治時代の佐伯市を紹介するコーナーや映像展示室。二階は、鶴谷学館の資料や独歩直筆の原稿やはがきの複製、作品の初版本などが展示されている。総事業費は二億九七〇〇万円。

一般公開は、午前九時～午後五時。入館料は大人二〇〇円、小中学生一〇〇円。月曜日休館(祝日の場合は翌日が休館)。問い合わせは市教委社会教育課(〇九七二―二二―三一一一)。(『朝日新聞』平成十五年四月十六日版)。

◆全国初の波＋太陽光発電

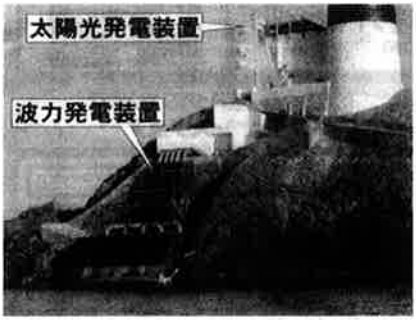
キレイな光で安全を確保―水ノ子島灯台

鶴見町水ノ子島の水ノ子島灯台に、波力発電と太陽光

発電を組み合わせたハイブリッド電源システムが完成し、運用している。同システムが灯台に導入されるのは、全国で初めて。

第七管区海上保安部によると、これまでは軽油を使った発電機が電源だったが、国が進めるクリーンエネルギー化施策の一環として、自然エネルギーによる発電方式にした。波力発電と太陽光発電の両方を採用することにより、季節や天候に左右されず、安定した電力量を確保できるという。

水ノ子島灯台



ハイブリッド電源システムが完成した水ノ子島灯台(上)と両発電装置＝大分航路標識事務所提供

二酸化炭素の排出抑制とともに、発電機の燃料を運搬する必要がなくなる利点がある。同様の発電方式は海に浮かぶ「灯浮標」などに用いられている。

水ノ子島は鶴見町梶寄から約十四キロ沖の豊後水道にあり、明治三十七年（一九〇四）に灯台が完成。平成十三年度から灯塔や電源設備の改修工事を進めていた（『大分合同新聞』平成十五年二月六日版）。

◆法定協設置案を可決

弥生町議会　三十日の臨時議会へ

総務委員会

佐伯市と南海部郡五町三村の「大同合併」を目指す法定合併協議会の設置議案を継続審議としていた弥生町議会の総務委員会（泥谷和喜委員長）が二十四日開かれ、法定協移行後も議論を深めることを確認し、全会一致で可決した。同議案は三十日に予定される臨時議会で審議するが、県内トップの法定協設置に大きく前進した。

総務委は今月十九日に、任意合併会長の小野和秀・佐伯市長が同協議会全員協議会に出席して事情を説明したことと、一瀬茂亀町長が四月中に結論を強く求めたこと

から開催。委員からは「時期尚早」の意見もあったが、泥谷委員長の「弥生町が指摘する問題が解決されない場合は法定協から下りることもある」の条件付きで可決した。

泥谷委員長は「委員会の考えを理解していただけると思う」と、三十日の本議会での可決に自信を示している。

法定協設置は九市町村の三月議会に提案されたが、「将来の地方自治の姿や理念が示されていない」などの理由で継続審議とし、今月一日の発足が宙に浮いていた。小野市長の「同意が得られない場合は組み替えも考慮」発言に対し、反発も強まっていた(『朝日新聞』平成十四年四月二十五日版)。

◆独歩記念館、来年度開館へ

一億五二二九万円の予算計上

佐伯市工事にスパート

佐伯市は城下東町に建設を進めている文豪・国木田独歩(一八七一―一九〇八)の記念館計画に平成十四年度予算で、一億五二二九万円を計上した。来年度早々開館を目指してスパートをかける。

「武蔵野」などの作品で知られる独歩は、二十代に同市の市立鶴谷学館で英語と数学の教べんをとった。佐伯滞在は一年足らずと短期間だったが、仕事の傍ら、自然に満ちた県南の山々を歩き、後に「鹿狩」「春の鳥」など佐伯ゆかりの作品を残している。

記念館は、独歩が下宿した坂本永年・鶴谷学館長の邸宅(木造二階建て、市指定有形文化財)を解体・修復して建設する。友人あてに書いた手紙、鶴谷学館での講義報告書、初版本などを展示する。グラフィックパネルやAV機器による独歩文学の紹介も考えている。

坂本邸は、江戸時代の佐伯藩主の御浜御殿で、明治初頭に現在地に移設したと伝えられる由緒ある建物。市は

建設中の独歩記念館

「建物内部も見学してもらい、独歩が暮らした二階から佐伯の山々を眺め、文学の世界に浸ってもらいたい」と強調する(『毎日新聞』平成十四年四月十一日版)。

◆九市町村法定合併協議会設置案

弥生町議会委継続審議に

弥生町議会の総務常任委員会(泥谷和喜委員長・五人)は十八日、佐伯市・南海部郡五町三村合併協議会(法定合併協議会)設置案を全会一致で継続審議とした。

同委員会は非公開。終了後に議会から報告を受けた一瀬茂亀町長によると、同委員会は「住民発議で、弥生・字目・直川・本匠の四町村による合併協議会設置に賛同した約千三百人の住民に対する説明ができていない」などの理由から、「否決はしないが、可決もできない」として継続審議としたという。

同案の取り扱いは定例町議会最終日の二十日、本会議での採決によって決まるが、今議会での可決は厳しい状況になっている(『大分合同新聞』平成十四年三月十九日版)。

◆元気出そう!佐伯

雑誌で歴史や文化紹介——中村南町の神原さん

「古里見つめ直して」

佐伯市中村南町の神原大さん(五七)=古書店経営=は、ふるさと発見マガジン「穂門の郷(ほとのごう)さいきいん(佐伯院)」を出版している。雑誌で佐伯のことを知ってもらうだけでなく、不況に苦しむ地域や住民を元気づけようと頑張っている。

「穂門の郷　さいきいん」は古代から中世にかけての佐伯市・南海部郡一帯の呼称という。雑誌はA4判、これまで三回発行した。定価は一冊三百円。「読みたい人には寄付をお願いしますが、ほとんど無料で配っています」(神原さん)という。

雑誌では主に県南地域の歴史や文化、人物を紹介している。歴史は中学、高校生にも理解し

雑誌『穂門の郷　さいきいん』を出版している神原さん

やすいようイラストを大きく使う。人物紹介は功績のあった有名人ではなく、商店やまちづくりグループなど地道に頑張っている人を中心に取り上げる。

雑誌には佐伯を愛する思いや、「歴史・文化を共有する住民が一つにまとまってほしい」という願いが込められている。

神原さんは「相次ぐ企業倒産などで佐伯の人は自信を喪失している。自分たちの古里の偉大さ、可能性を見つめ直してほしい」「これからの地域は、合併問題を見ても分かるように自立を求められる。悲観するだけでなく、佐伯も地域間競争という〝戦国時代〟を勝ち抜く元気を出してほしい」と呼びかけている。問い合わせは神原さん(電話〇九七二―二三―二六六八)。(『大分合同新聞』平成十四年三月十七日版)

◆「栂牟礼城跡」を名勝地に

佐伯市鶴岡地区、地元住民が登山道整備

佐伯市と弥生町の境、栂牟礼山(一二三三・七メートル)の山頂にある「栂牟礼城跡」を名勝地としてPRしようと、地元の同市鶴岡地区、地元の同市鶴岡地区区長会、佐伯鶴岡高校の生徒、教職員ら約四十人が参加。

細い急な道があるだけで整備が行き届いておらず、登山者も多くなかった佐伯市側の登山道二本で作業。丸太を使って階段を設置するなどしたほか、山頂の木の伐採もし、景色を見渡せるようにした。

栂牟礼城は、一五二七(大永七)年に、佐伯惟治が合戦でこもった山城とされる。頂上は平地になっているが、城壁などはない。頂上付近には約二千本のツバキの原生林があり、春には雄大な景色とツバキの花が楽しめる。

小野格重鶴岡地区区長会長は「これまで埋もれてきた史跡を再発見し、名所としたい。昨年から、秋に登山しながらの散策会を催しており、地元の史跡を保存しながらアピールしたい」と話している(『大分合同新聞』平成十四年二月二十五日版)。

丸太で階段をつくり栂牟礼城跡の登山道を整備する地元住民ら

◆エメリー採掘最後の砦

宇目町木浦鉱山地区

県内でただ一か所、金属鉱山が残る木浦鉱山地区では現在、エメリーが採掘されている。世界ではギリシア、トルコ、アメリカと日本の四か国、日本では木浦鉱山だけが産地となっている。社長の羽田準一さん(六五)と鉱務課長の佐藤若美さん(五〇)の二人で操業を続ける採掘、製造会社「木浦エメリー」を訪ねた。

エメリーはダイヤモンドに次ぐ硬度を持つ天然の鉱産物。黒色で成分はルビーやサファイアと同じという。世界的な産地であるギリシアのナキサス島エメリー岬がその由来で、道路の滑り止めや研磨材などに使用される。同地区で発見されたのは一九五九年で、中島鉱山が六三年から採掘を開始。その後、六七年に鯛生鉱業、八四年に木浦エメリーが操業を引き継いできた。

最盛期の九〇年には、約二十人の採鉱員がおり、原石四千㌧を採掘、製品二千六百㌧を製造していたが、景気の後退と安価な人工のエメリーに押され、九六年からは坑道での採掘から露天掘りに変わった。昨年は原石九百四十四㌧を採掘、製品の出荷は六百三十九㌧となっている。

日本唯一のエメリーを採掘する木浦エメリーの羽田さん(前)と佐藤さん

羽田さんは「木浦鉱山地区でも一部でしか採掘されない珍しい鉱石。地区内でも鉱山は一つだけになってしまったが、地区の地名でもある鉱山を守るため、最後の砦(とりで)として操業を続けたい」と力強く語った(『読売新聞』平成十四年二月二十五日版)。

◆佐伯の「大入島架橋」

議会特別委と区長会が懇談

佐伯市議会の港湾・架橋建設調査特別委(戸高弘行委

員長)と大入島区長会(丸山榮区長会長)の現地懇談会が二十一日、マリンハウス「海人夏館」で開かれた。佐伯港湾整備計画に伴う大入島・石間海岸の埋め立て事業の紛糾で中断していた「大入島架橋」建設推進を目指すものだが、区長からは港湾整備計画の説明不足が混乱を招いたとの指摘や、離島の悩みを解消するための早期架橋を求める声が出た。

大入島架橋は、佐伯港沖の大入島と市街地を約七〇〇㍍の橋で結ぶもの。七十年(昭和四十五年)から推進運動を続けてきたが、しゅんせつ土砂での石間海岸埋め立て事業を巡って石間地区や佐伯市漁協内で対立が続き、県から「埋め立て事業の解決」が条件とされていた架橋問題は宙に浮いていた。

懇談会は昨年十月末、埋め立て海域の漁業権消滅を漁協が承認したことから解決の流れが出てきたとして開いた。また、架橋建設推進運動を進めることで、深刻な対立が続いている島内の融和につなげたいとしている(『朝日新聞』平成十四年二月二十二日版)。

◆大入島埋め立て

県側が争う姿勢、漁業補償差し止め訴訟

佐伯湾の大入島埋め立てに反対している住民が、県を相手取り、漁業補償金の差し止めを求めた訴訟の第一回口頭弁論が十九日、大分地裁(須田啓之裁判長)であり、県側は被告不適格などを理由に争う姿勢を見せた。

訴状などによると、昨年十月に開かれた佐伯市漁協総会で埋め立て地に隣接する石間区の漁民(二十二人)が、補償金を条件に工事で漁が中断されるなどの制約を受けることに同意した。しかし反対住民は、同意手続きは水産業協同組合法に違反し、総代会の同意を根拠に補償金を支払うのは違法として、平松守彦知事ら四人を相手に提訴した。

県側は、被告四人のうち土木建築部長、港湾課長は県規定により被告として適格ではなく、知事と佐伯土木事務所長については訴えの棄却を求めるとし、具体的な答弁書は「後日提出」としている(『西日本新聞』平成十四年二月二十日版)。

◆「平和の塔」を除幕

第二次大戦の戦没者慰霊

第二次大戦で戦病死した佐伯市出身の旧日本兵を慰霊する「平和の塔」が完成、五日、鶴谷町三丁目の野岡緑道ふれあい広場で除幕式があり、一五三五柱を納めた。

佐伯市は第二次大戦の引き金となった真珠湾攻撃で連合艦隊が出撃した地だが、郷土出身で戦病死した軍人の霊を慰め、平和への願いを形にしようと七六九万円をかけて制作。高さ四・二㍍で、台座の上に合掌する手をかたどった黒御影石製のオブジェが載っている。

除幕式には小野和秀市長や市議ら約五十人が参加。小野市長は「平和への気持ちを新たにするシンボルとしてこの塔をかわいがっていただきたい」をあいさつした(『西日本新聞』平成十四年二月六日版)。

真珠湾攻撃で連合艦隊が出撃した地・佐伯市にできた「平和の塔」

◆「彦島の海を守る会」を設立

佐伯藻場造成事業に反対

佐伯市の「彦島の海を守る会」の設立総会が二十六日、同市の西上浦地区公民館であった。

同会は、国土交通省が彦島沖で実施している藻場造成事業について、「佐伯港港湾整備事業でしゅんせつした、水中生物に極めて有害なヘドロを投棄している」として、事業中止と海洋汚染防止を求めている。

総会には地元の西上浦地区の会員ら約五十人が出席。発起人代表の宮下良明さんが「藻場造成で住民への説明なしにヘドロを投棄。流出したヘドロが海を汚染し、海藻類が極端に減っている。きれいな海を後世に残す義務と責任がある」とあいさつ。会長の宮下さんら役員を選出。和久博至理事(市議)が経過と現状を報告。「佐伯の

「彦島の海を守る会」設立総会

自然を守る会」の清家サダ子会長が「力を合わせて運動を進めよう」とあいさつした。

彦島沖の藻場造成事業には、大入島の埋め立て事業に反対している、自然を守る会が反対運動をしてきた。海を守る会は、自然を守る会の会員を含めて、会員約二百という(『大分合同新聞』平成十四年一月二十七日版)。

◆〝独歩〟ゆかりの文学碑の除幕式　弥生町

弥生町の「文学碑」除幕式が二十四日、町内の尺間山八合目駐車場広場であった。碑文は、明治時代の文豪・国木田独歩が尺間山(六四六㍍)に登ったことをつづった日記「欺かざるの記」から抜粋している。

町議や町文化財愛護婦人団などの約四十人が参加。一瀬町長が「設置した文学碑を巡って、町内を散策してもらいたい」とあいさつ。碑文を選んだ町文化財調査委員代表の古藤田太さんが内容の説明をした。

説明をする古藤田太さん

文学碑は、桃色御影石造り。高さ約二㍍、幅一・八㍍。「尺間山への登山者が親しめるように」と、駐車場を設置。事業費は約六十万円。同町は一九九三年度から九七年度まで、「歴史と文化の光る町づくりを」と、町ゆかりの文章を記した文学碑を設置してきた。本年度から第二弾として取り組みを継続。今回が第二弾の最初で、六番目碑となる(『大分合同新聞』平成十四年一月二十五日版)。

川名のルーツ

◆神原(こうばる)川　祖母(そぼ)山の北ふもとに神原。祖母山の神である健男社、六寿社などあるので、それに由来するか。もしくは川をコ・コウと読むので、川原か。

◆九折(つづら)川　傾山の西を越して大分と宮崎両県境に九折越がある。つづら折りのけわしい山道で、大分側のふもとに九折の集落。川は傾山に発してここを流れる。

(『日本全河川ルーツ第辞典』)